

建築家岡田鴻記の経歴と建築活動

Biography and works of Okada Kouki, Architect (1907-1981)

大田 雄介

1. はじめに

岡田鴻記(図1、以下、岡田)は、北海道帝国大学(以下、北海道帝大)理学部附属厚岸臨海実験所(1931)や杉野目邸(1933)、北海道帝大農学部本館(1935)の設計者として伝わる。岡田については、既往研究で部分的な経歴が述べられているものの、経歴や設計活動の全容は詳らかにされていなかった。本稿は、岡田の経歴および設計活動を明らかにし、地方の建築家活動における岡田の歴史的な位置付けを行うことを目的とする。



図1 岡田鴻記

2. 経歴(表1)

建築家としての岡田の活動時期は、1928年の北海道帝大営繕課勤務から1981年に逝去するまでの約53年間であった。この間、転機となったのは、1.北海道帝大営繕課勤務、2.北海道帝大営繕課在籍期における民間建築の設計活動、3.軍事関連施設の設計、4.日本油化工業(株)平岸工場への赴任、5.北海道開発大博覧会の総合設計、6.岡田設計事務所の開設、である。

神戸高等工業学校建築科では、古宇田実の西洋建築史、阪谷良之進の日本建築史、田邊平学のRC造、永澤毅一の鉄骨造を修得している。

北海道帝大営繕課在籍期における民間建築の設計活動時期は、1930年から1937年である。1938年以降に民間建築がみられないのは、1937年にはじまる建設資材の統制、翌年2月より3年間の満州出征、1941年からの営繕課主査担当によると考えられる。

『北海道帝国大学職員住所録』では、1939年以降岡田の名が営繕課技手の筆頭に上がる。加えて、主査担当や1943年7月の技師昇格からも、この時期に岡田が課長に次ぐ位置にいたと分かる。

1944年に北海道帝大退官後、赤平村平岸にある海軍軍需工場、日本油化工業(株)の建築課長職に就く。1945年に同社解散後、元同僚ら有志と同工場で日本精密木工(株)、北星興業(株)と続けて創立する。

1950年7月、旭川で開催された北海道開発大博覧会の総合設計、実施設計を行った。同博覧会を契機として、同年9月に岡田設計事務所を旭川市に開設、当初一人で設計業務を行った。北海道に開設された設計事務所は1920年代よりみられ、岡田設計事務所はやや遅れるものの、まだ北海道に設計事務所が少ない時期の開設であった。

1955年から1961年にかけて、所員を事務所の設計業務につかせ、自らは設計を行わなくなる。その後、晩年まで事務所の経営および所員の教育にあたった。初期7件および自邸(1962)は、岡田の設計と確認できる。

3. 設計活動

3-1. 北海道帝大営繕課在籍期 1928.3-1944.1(表2)

北海道帝大在籍期には、北海道帝大諸施設18件、民間建築32件、軍事関係施設7件を設計した。また、北海道帝大諸施設5件の主査を確認できる。多くは札幌市であるものの、旭川市、帯広市、池田町、釧路市、

表1 岡田鴻記の略歴

年	月.日	事蹟	
1907 (明治40)	5.15	北海道下富良野村扇山に生まれる	
1922 (大正11)	3.	富良野町立扇山尋常小学校卒業	
1925 (大正14)	3.	北海道庁立旭川中学校卒業	
1928 (昭和3)	3.	神戸高等工業学校建築科卒業、卒業設計『幼稚園』	
	3.	北海道帝国大学営繕課 4. 北海道帝国大学営繕課技手	
1929 (昭和4)	1.	幹事候補生として入営、休職 12. 北海道帝国大学へ復職	
1931 (昭和6)	5.	北海道帝国大学予科助教授兼任	
1932 (昭和7)	3.	工兵少尉任命	
1933 (昭和8)	9.	北海道帝国大学農学部附属植物園寄附温室評価員	
1934 (昭和9)	-	周と結婚	
1935 (昭和10)	3.	北海道帝国大学農学部物品検取官吏	
1936 (昭和11)	7.	北海道帝国大学行幸準備工係員	
1937 (昭和12)	3.	北海道帝国大学農学部物品検取官吏 9. 4週間入営	
	10.	北海道帝国大学農学部物品検取官吏	
1938 (昭和13)	2.	4週間入営 臨時召集下令 満州へ赴く、関東軍司令部付	
1939 (昭和14)	7.	陸軍工兵中尉任命	
1941 (昭和16)	4.	召集解除 7. 臨時召集、北部第7部隊	
1942 (昭和17)	1.	召集解除 2. 北海道帝国大学低温科学研究所建築委員会幹事	
	4.	北海道帝国大学超短波研究所設立委員会幹事	
	12.	海軍省低温研究室新営工事及事務取扱	
1943 (昭和18)	3.	北海道帝国大学暖房委員会書記、給水委員会書記、瓦斯委員会書記、低温科学研究所建築委員会書記、北海道帝国大学土木専門部授業(構造力学)囑託	
	7.	北海道帝国大学営繕課技師、叙高等官七等	
	12.	臨時召集、北部第7部隊	
	1.	依願免本官	
1944 (昭和19)	-	日本油化工業株式会社建築課長(空知郡赤平町平岸)	赤平町平岸工場期
	-	日本油化工業株式会社平岸工場終戦処理責任者、同社解散	
1945 (昭和20)	7.	日本精密木工株式会社創立(資本金19万円)、平岸工場長	
1946 (昭和21)	5.	資金難、社内労働争議から日本精密木工株式会社倒産	
	9.	北星興業株式会社創立(資本金19万円)、社長就任	
1947 (昭和22)	7.15・8.23	北海道開発大博覧会総合設計(旭川市)	
	8.	北星興業株式会社社売却 9. 岡田設計事務所開設(旭川市)	
1950 (昭和25)	-	札幌市桑園に事務所兼住宅を新築、旭川支所開設	
1952 (昭和27)	3.	事務所を法人に組織、代表取締役就任	
1958 (昭和33)	-	名寄女子短期大学教授兼任	
1960 (昭和35)	-	東京支所開設	
1968 (昭和43)	-	静修短期大学教授兼任	
1969 (昭和44)	-	帯広支所開設	
1970 (昭和45)	-	本社新社屋落成、8. 苫小牧支所開設	
1972 (昭和47)	-	釧路支所開設	
1974 (昭和49)	-	株式会社会岡田設計と社名変更	
1976 (昭和51)	-	10.2 逝去、享年74歳	
1981 (昭和56)	-		

表は遺族への聞き取り、『履歴簿』(北海道大学人事課所蔵)、『岡田設計30年のあゆみ』を基に作成し、参考文献、現地調査で補完した。太字は転機となる事項。月の不明なものは、“-”と記す。

さらに樺太庁豊原市や満州まで及ぶ。

3-1-1. 北海道帝大営繕課の設計体制と諸建築

営繕課では、大半の主要建築の設計を技手が担っていた。さらに、医学部附属医院製薬室(1932、図4)の設計では、北海道帝大薬局長酒井隆吉が「(略)、、技手岡田氏の手によって立派な設計図が出来上がりました」と述べている。酒井の言説から、担当教官の意向を基に、営繕課長、担当技手を交えて協議、検討、その後技手によって設計されたことが分かる。

北海道帝大では、RC造7件、鉄骨造2件、SRC造1件、煉瓦造1件、木造2件、計13件25を設計した。RC造のうち、理学部附属厚岸臨海実験所(図2)、医学部附属医院製薬室、同皮膚泌尿科研究室(1933)では、外壁をはじめ装飾が少なく機能主義の影響がみられる。厚岸臨海実験所では、水族室、標本室を円形平面に、実験室を矩形平面にとり、外観に各々を表徴している。製薬室では、螺旋階段を強調し、円塔状に表現する。

皮膚泌尿科研究室では、1階、2階、階段を後退させ、階段状の外観にしている。また、厚岸臨海実験所、製菓室には、細部にアールデコ風装飾がみられる。

木造のうち1件は、ニセコアンヌプリ樹氷観測所(1943)で、中谷吉郎の氷着実験施設である。建設にあたっての構法の検討を中谷共著『木造高山観測所の設計及び建設』に報告している。

大学施設の多くにモダニズムの影響を受けた意匠がみられる。一方、RC造、鉄骨造の設計やニセコアンヌプリ樹氷観測所において構造的な配慮が窺える。

3-1-2. 民間建築における設計活動の形態と諸建築

民間建築の設計活動は、「K.OKADA Architect」と称したことや、(株)清水組『工事年鑑皇紀二五九九』に富貴堂書店の設計者として岡田の個人名が挙がることから、岡田個人の活動であったことが分かる。営繕課勤務と並行して32件もの民間建築の設計監理を行ったことは、特筆すべき設計活動の形態といえる。

施主は、大学関係者や縁戚、知人が多く、人脈を活かして設計を受けていたことが分かる。また、その他に企業や商店、宗教もみられ、特定の人脈のみに依らない設計活動を行った。

民間建築は、主に住宅、事務所、工場、商店である。住宅の意匠には、モダンな外観を基調に和風、洋風を取り入れている。杉野目邸(図5)はハーフティンバーを用いたイギリス風の外観とする。志賀邸(1935)は細部にスペイン風装飾をもつ。小林邸(図7)は胴部を下見板張りとした外観で、内部には和風、洋風の意匠をみせる。また、切妻屋根の採用が多く、円窓を多用した。さらに、内部では造作家具や詳細に強く関心を示している。

住宅15件では、初期から居間や寝室を中心に二重窓を採用、5件ではボイラー室を備えた中央暖房とする。加えて、多くでサンルームや広縁がみられ、一部ではテラスに深く屋根をかける、「冬期間の広縁として」屋内庭園を設けるなど「北国の住宅」への配慮をみせる。

RC技術を用いた市街地建築の北海タイムス社印刷工場(1931、図3)、精養軒ホテル計画、富貴堂書店(1937、図8)、小林商店倉庫(1937)では、装飾の少ない平滑な外壁による簡潔な外観となっている。商店では1階陳列場を考慮して、正面および平面を構成している。東本願寺札幌別院御茶所(1934)は入母屋造銅板葺であり、向拝、外陣、内陣、後拝を配する御堂の平面構成としている。

民間建築では、RC技術による市街地建築を代表してモダニズムの影響がみられる。一方、杉野目邸や東本願寺札幌別院御茶所、加えて多くの内部や細部には、和風、洋風の意匠を取り入れている。また意匠に加え、機能面、設備面からも近代化を図っている。

3-1-3. 札幌市街地建築のRC造化

北海道帝大諸施設では関東大震災(1923)以降RC造が盛んに用いられる。

理学部附属厚岸臨海実験所や医学部附属病院製菓室の設計前には担当教官が洋行に赴く。薬局長酒井は、



図2 理学部附属厚岸臨海実験所模型



図3 北海タイムス社印刷工場

表2 岡田鴻記 北海道帝国大学在籍期 設計一覧

設計	竣工	名称	区分	構造	延床面積	所在地
1928	1928	工学部印刷工場	□	RC1	51坪	札幌市
1928	1929	医学部附属病院伝染病室	□	RC3	503.6坪	札幌市
1928	1928	空沼ヒュッテ	■	W2	40坪	札幌市
1929	1929	北海道帝国大学配電所	□	RC1	20坪	札幌市
1930		農学部昆虫学標本室補修	■	—	—	札幌市
1930	1931	理学部附属厚岸臨海実験所(図2)	□	RC3Ba1	228.5坪	厚岸町
1930	1931	北海タイムス社印刷工場(図3)	△	SRC3	437.3坪	札幌市
		K氏新婚住宅	○	W1	13.8坪	不明
1931	1931	予科寄宿舎煙突	□	RC	—	札幌市
1931	1932	医学部附属病院製菓室(図4)	□	RC2	77坪	札幌市
1932	1932	理学部附属厚岸臨海実験所 実験室増築並既設建物模様件 上屋根取設	■	RC	22.5坪	厚岸町
1932		医学部附属病院精神病室 上屋根取設	■	—	—	札幌市
1932		昭和浴場	△	W2	94坪	札幌市
1932	1933	医学部附属病院皮膚科研究室	□	RC2	121.3坪	札幌市
		M氏業家の家	□	W2	48坪	不明
1932	1932	農学部附属植物園温室	□	S1	290坪	札幌市
1932	1934	医学部附属病院日光浴室	□	S1	61坪	札幌市
1932	1934	東本願寺札幌別院御茶所	△	SRC1	41.5坪	札幌市
1933	1933	杉野目邸(図5)	◇	TFBr2	88.4坪	札幌市
1933		柴田邸	○	W2	52坪	札幌市
1933	1935	農学部本館(図6)	□	SRC5	2,710坪	札幌市
1934		時田邸	○	W2	65坪	札幌市
1934	1934	旭川瓦斯株式会社工場	△	S1	79.3坪	旭川市
1934		佐藤呉服店	△	W2	155坪	池田町
		借家住宅	○	W2	35坪	不明
		借家住宅B	○	W2	25.5坪	不明
		借家住宅C	○	W1	15.3坪	不明
		精養軒ホテル計画	△	RC5	1,125坪	札幌市
1934		明昭農工実行組合倉庫	△	RC1	65坪	栗沢町
1935	1936	農学部本館第二期	□	SRC		札幌市
1935	1935	志賀邸	◇	W2	89.2坪	札幌市
		シーク洋装店	△	W2	81坪	不明
1935		紅屋呉服店	△	W2	137坪	帯広市
		私の家	○	W2	37.2坪	札幌市
		中川自転車店	△	W2	123坪	不明
		小林商店出荷々造倉庫	△	W2	27.8坪	札幌市
1936		小林邸(図7)	○	W2	64.3坪	札幌市
		K未亡人別宅、倉	○	W2+M1	55.2坪	不明
		M氏農村住宅	○	W2	57.8坪	不明
		Yキャンプハウス	○	W1	6.5坪	不明
1937	1937	農学部肉製品製造実習室	□	Br1	84.8坪	札幌市
1937	1937	富貴堂書店(図8)	△	RC4	749坪	札幌市
		E君の家	○	W2	38.3坪	不明
		M氏邸	○	W2	55坪	不明
1937		廣田商店	△	W2	50.5坪	豊原市
1937	1937	小林商店倉庫	△	RC4	198坪	札幌市
		O博士邸	○	W2	45.8坪	不明
1937		仙台学寮	◇	RC3	243坪	札幌市
		地下防空壕	▽	RCBa1	80m ²	不明
1939		関東軍 地下飛行機格納庫	▼	RCBa		平安鎮
1939		ハルハ河防架施設	▼	RCBa		ノモンハン
1940		トーチカ	▼	RCBa		ハイラル
1941		関東軍 工場	▼	RCBa	120坪	チチハル
1941		興安大路アパート	▽	Br2	662坪	新京
1941	1941	低温科学研究所	※	RC3+W2		札幌市
1942	1942	ニセコアンヌプリ樹氷観測所	□	W1Ba1	14坪	狩太村
1942	1942	農学部附属植物園庁舎	※			札幌市
1942	1943	工学部生産冶金研究室	※			札幌市
1943	1943	ニセコアンヌプリ山頂観測所	※	W2	97.0坪	狩太村
1943		中山鉄工場 鋳物工場	▼	W1	252坪	札幌市
	1945	工学部橋梁学研究室	□※	W1		札幌市

表は『岡田家史料』、『経歴』、北大所蔵図面を基に作製。設計年順とし、竣工年を併記した。竣工年=—は、実現していないと確認されたもの。区分凡例：□=北海道帝大、◇=大学関連、○=住宅、△=民間(大学関連、住宅を除く)、▽=軍事施設、※=主在。白抜きは岡田による設計、黒抜きは増改築および関係の程度が確認出来ないものを示す。構造凡例：RC=鉄筋コンクリート造、W=木造、S=鉄骨造、SRC=鉄骨鉄筋コンクリート造、Br=煉瓦造、TFBr=木竹煉瓦造、M=石造、RCBa=鉄筋コンクリート地下造、数字は階数、Ba+数字=地下階数、延床面積は、確認される限りで補正した。

※録行形文化財



図4 医学部附属病院薬劑室模型



図5 杉野目邸外観透視図

洋行により見聞した先端的設備を導入するため、製菓室のRC造化や諸室面積の十分な確保を求めている。

岡田が北海道帝大で設計のRC造7件は、初めの5年間に集中している。岡田が神戸高等工業学校でRC造、鉄骨造を修得していること、大学諸施設の主流が木造からRC造へ切り替わる時期の採用から、営繕課は岡田にRC造を担当することを期待していたと考えられる。

1931年より予科助教授を兼任し、構造力学を担当する。予科助教授兼任は、岡田が営繕課で構造設計の能力を認められていた証とみることができる。

民間建築では、東本願寺札幌別院御茶所において、前御茶所が老朽が著しく再建に至った経緯から、耐震耐火を謳いSRC造を採用している。

3-1-4. 軍事関係施設

軍事関係施設は、多くが満州で携わった関東軍諸施設の設計であり、詳細不明な施設が多い。興安大路アパート(1941)は、1940年より満州の政府によって進められた住宅政策に連動するものと推測される。

3-2. 赤平町平岸工場期 1944.1-1950.9 (表3)

日本油化工業(株)では、同社や北海道炭素工業(株)などの軍需工場の建設にあたる。

日本精密木工(株)は、700名程の建設会社で、三井芦別鋳業所各施設の建設を請負う。ここで、岡田はNSM式量産住宅(1946)やNSM式キャンプストアを考案する。前者は住宅設計の規格化、後者は組立式可搬式屋台と、共に工場生産による大量供給を提言している。

北星興業(株)は、30名程の建設会社で、三井芦別、奈井江鋳業所各施設の建設にあたる。1949年に設計の三井奈井江鋳業所アパート、明治製菓札幌売店改装の図面が確認される。後者の図面には、「K.OKADA Architect」とあり、岡田個人の活動と推察できる。

三井奈井江鋳業所アパートは、装飾のない直線的構成とし、階段室や開口部を突出させる外観となっている。

北海道開発大博覧会(図9)では16件の木造施設を設計したことを確認できる。意匠は、装飾を抑えた平滑な外壁によって造形的に構成した外観が多く、モダニズムの影響がみられる一方、他に和風、洋風の外観がみられる。また、設計は「将来高度の転用率を有するよう設計に考慮を払った」。会期後、会場の一部は公園と付帯公共施設、および旭川市立常盤中学校(1950)となる。

3-3. 岡田設計事務所開設以降 1950.9-1981.10 (表4)

岡田設計事務所初期7件は、主に学校建築、商業建築である。旭川市を拠点に活動し、札幌市、江別市まで及ぶ。また、自邸が最後の設計となる。

アサヒビル(1954)では、RCの柱と梁を表出させ、開口を大きくとった外観としている。

4. むすび

岡田の経歴と設計活動を通じ、次の知見を得られた。

i. 北海道帝大在籍期、岡田は北海道帝大営繕技術者であり、一方で札幌を拠点に民間建築を設計した建築家であった。公務以外の設計活動を旺盛に行った点が

表3 岡田鴻記 赤平町平岸工場期 設計概要

設計年	名称	構造	延床	所在地
1944	北海道炭素工業株式会社 各種工場、厚生施設		3200坪	赤平町
1945	日本油化工業株式会社空知工場 各種工場、厚生施設		7750坪	赤平町
1946	日本精密木工株式会社 平岸製作所		870坪	赤平町
	齊藤藤吉商店 漬物工場	W2	110坪	旭川市
	NSM式量産住宅	W1	15坪	—
1946頃	NSM式キャンプストア	W1	1.9坪	—
1947	三井芦別鋳業所 変電所、二坑病院、配給所、 共同浴場、火葬場		659坪	芦別町
1948	三井芦別鋳業所 チップラー上家、 送炭コンベヤー、理髪館		310坪	芦別町
1949	三井奈井江鋳業所 アパート	RC3	750坪	美唄町
	明治製菓札幌売店改装	RC3		札幌市
	料亭いづみ改装	W2	120坪	札幌市
	札幌市立一条中学校 講堂舞台			札幌市
1950	旭川市立常盤中学校舎	W2	1140坪	旭川市
	北海道開発大博覧会 (図9)	W	1760坪	旭川市
	北海道芦別高等学校体育館その他	W1	305坪	芦別町
	芦別町民館	W2	248坪	芦別町

表は、「経歴」を基に作製。構造凡例：RC=鉄筋コンクリート造、W=木造、数字は階数、所在地が“-”のものは、カタログのみを確認。

表4 岡田設計事務所 初期設計概要

竣工年	名称	構造	施工	設備	所在地
1951	旭川市立旭川東五条小学校	Br2	田中組	ベチカ暖房	旭川市
1952	岩田醸造株式会社	RC+Br3	盛永組	蒸気暖房	江別市
	旭川市立旭川春光小学校	Br2	広野組	ベチカ暖房	旭川市
1952頃	師尾薬局倉庫				旭川市
1953	札幌市立中央創成小学校	RC3			札幌市
1954	アサヒビル	RC6Ba1	田中組	蒸気暖房	旭川市
	銀映館	W2	高組	蒸気暖房	旭川市
1962	自邸	W2			札幌市

表は、「経歴書」、「株式会社岡田設計 30年の歩み」を基に作製。構造凡例：RC=鉄筋コンクリート造、W=木造、Br=煉瓦造、数字は階数、Ba=地下階数。

特徴で、昭和初期の北海道建築界を官公の営繕技術者が担っていたことを実証する好例といえる。赤平町平岸工場期にも個人の設計活動がみられ、岡田は北海道における民間建築設計業務の需要を認識し、北海道でまだ設計事務所の少なかった時期の事務所開設に至ったと推察できる。

ii. 岡田は1920年代以降に展開された北海道帝大や札幌の民間建築のRC造化の普及を担った。神戸高等工業学校でRC造、鉄骨造の修得を経て、北海道帝大で実績をあげ、さらに民間建築のRC造まで手掛けるようになった。北海道帝大退官以降には、札幌に留まらず、美唄町、旭川市までRC造化を波及させた。

iii. 意匠面の特徴として、北海道帝大在籍期にはRC造を中心にモダニズムの影響がみられる一方で、和風、洋風の意匠を取り入れるものがあつた。特に、RC造では装飾を抑え、造形的に構成した外観を得意とした。北海道帝大退官以降は、モダニズムの影響がより強くみられるようになる。これは、北海道帝大退官を契機に、より合理性、生産性を目指した結果と推測される。岡田は、北海道でモダニズムを展開した嚆矢の一人と位置づけられる。

図版出典

1. 2. 3. 4. 6. 7. 岡田孝生所蔵写真 5. 杉野目浩所蔵 8. 前掲28、(株)清水組『工事年鑑皇紀二五九九』掲載 9. 岡田設計事務所『経歴書』(1966/岡田設計事務所)掲載

(本稿は筆者執筆の北海道大学建築史意匠学研究室、平成18年度修士論文を抜粋要約したものである。)



図6 農学部本館第一期



図7 小林邸



図8 富貴堂書店



図9 北海道開発大博覧会 常盤会場